

名古屋芸術大学グループ

通信

【特集】アートの可能性 医療・福祉と芸術

11
October
2009

Feature

Close up! NUA-ism

～進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-OG

片思いのエキス なんですよ
名知聡子

NUA-STUDENT

「やっぱり人だよねって」
デザイン学部デザイン学科
ヴィジュアルデザインコース 4年 中野香織
「デザインも個性だと思っんですよ、うん」
大学院 デザイン研究科 1年 桑山明美

News/topics

ニュース&トピックス

大学/大学院

- 学生支援課の発足にあたって
学生部長 菅嶋康浩
- 飛騨・世界生活文化センター関連事業
クレイアニメを作るうー 輪ニメーション2009

音楽学部

- 名古屋芸術大学ミュージカルが
「第3回 大邱国際ミュージカルフェスティバル大賞特別賞」
を受賞しました！
- ジャズポップスコース・ワークショップ：
Brazilian Music “Happy Dreams” が行われました！
- 親子で楽しむ!! 「音楽は友だちコンサート」が行われました

人間発達学部

- 2009オープンキャンパス on 8.29.
人間発達学部 子ども発達学科
- 人間発達学部主催「特別公開講座」が行われました

美術学部/デザイン学部

- 新しい自分に出会えるキャンパスライフの体験
「一日芸大生」が開催されました！
- 美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展
～ザ・ベストテンから日本レコード大賞まで～ 関連イベント
「ザ・ベストテン The Talk」/「ザ・ベストテン The Concert」

美術学部

- 美術学科洋画コースの主催で
「現代美術に関するレクチャーと対話」
シリーズが開催されました

デザイン学部

- 2009年度デザイン学部特別客員教授
「脇阪 克二 (SOU・SOU) 展」が行われました
- デザイン学部クラフトブロックの作品展「素材展」

グループ校特集/名古屋保育・福祉専門学校

- カリキュラム・シラバス・授業の見直しから
名古屋保育・福祉専門学校副校長 藤澤卓実

コラムNUA

沈まぬ太陽の思い出
人間発達学部教養部会 講師 東條文治

Master Artist

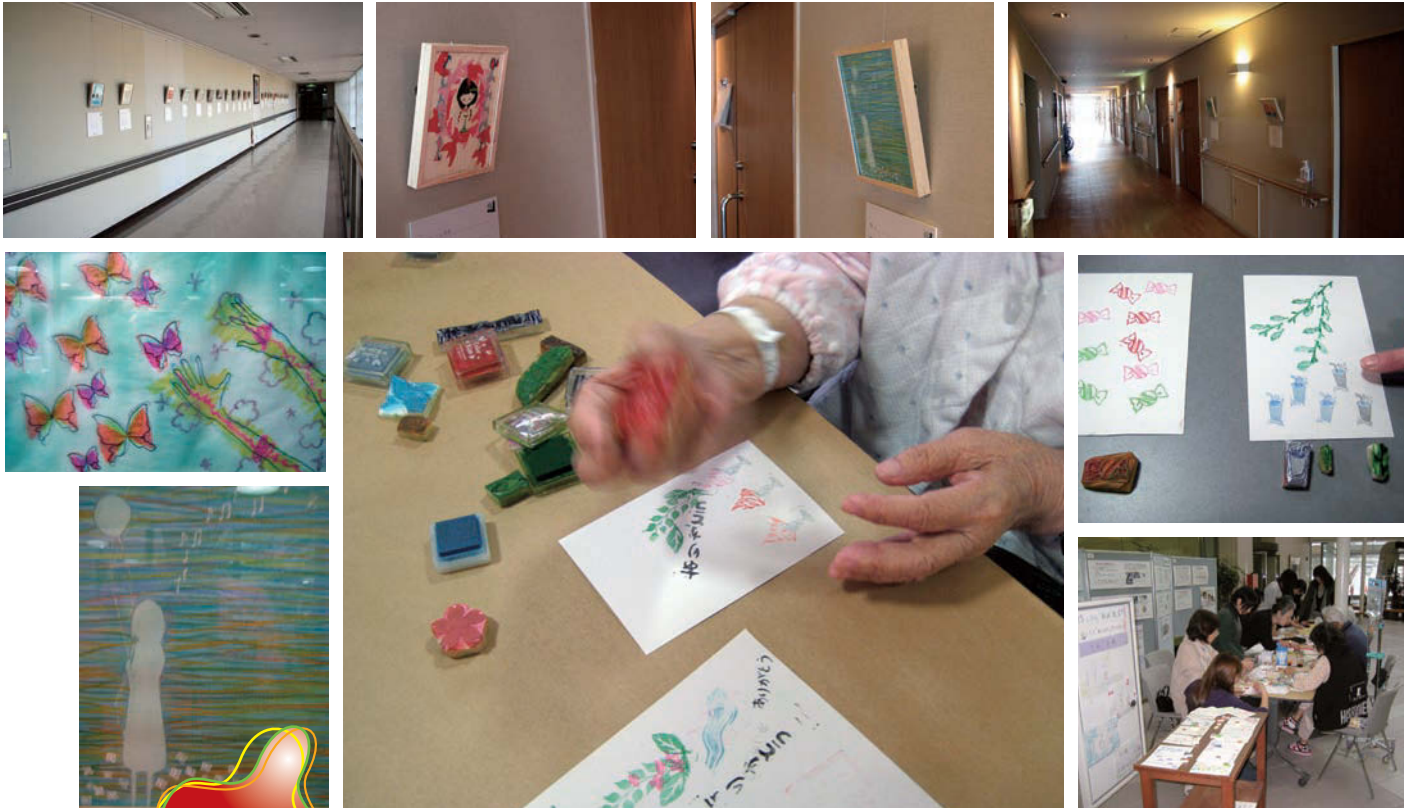
マスターアーティスト

自由と不自由
美術学部 美術学科 洋画2コース准教授
須田真弘

Information

インフォメーション

- 2009年10月～
2010年3月までの
主な行事・イベント
スケジュール
- 編集後記



アートの可能性 医療・福祉と芸術

今日、さまざまな場面で、アートが求められる機会が増えてきています。自治体や公的機関などで開催される地域活性を目的とした市民参加型のワークショップなど、数多くのプロジェクトが開催されているのはご承知の通りです。本学もまた、それらの多くのプロジェクトに協力しています。それでは、さらに一步押し進めて、アートが、人に対して、個人に対しての貢献ということではどうでしょうか？ 絵画や音楽に感銘を受けたり、心を励まされた経験は誰にでもあります。しかし、それらの体験は、ごく個人的なものでしかありません。アートの持つコミュニケーションメディアとしての効用、人間関係の形成に貢献するといった特性は、広く活用されているとはいいがたい状況ではないでしょうか。今回は、コミュニケーションメディアとしてのアートが、社会に貢献できる大きな可能性を持っているケースを紹介しましょう。医療・福祉とアートの係わりです。

ホスピス・緩和ケア病棟に入院するがん患者さんのための作品を制作する「いのちと希望のアート展」の連続講座、また、音楽が生理的、心理的にどんな作用をもたらすか、音楽療法の可能性を研究する久保田進子教授、社会と係わるアートの最先端を取材しました。



▶ 一生懸命創ったら伝わるから大丈夫

「いのちと希望のアート展」のための連続講座担当 西村正幸 教授

自身がお世話になった岡崎市の画廊、ノブギャラリーのオーナー鴨下 延弘さんを、がんで亡くし、それをきっかけとしてホスピス研究会 OKAZAKI 金田 亜可根さんと協力し、がん患者さんへ向けての作品創り、学生たちも含めた活動をはじめ。元気だった方が突然逝ってしまうという体験と、日本人の二人に一人はがんに命を奪われている現実。この2つのことは、誰もが、特に若い人が、心構えしておくべきことだという。

美術をやっている人が、誰かのために動くということは、一般的に珍しいこととされているようですが、アーティストとは、表現する人であり、社会的な問題に対してもメッセージを発することができる立場にあります。アートの中でも、音楽の世界ではメッセージを発することは普通のことですが、美術の世界では、殊に日本では意外に少ないんです。欧米では、重い社会的なテーマを、自分のテーマとして作品を発表するアーティストも数多くいて、大きな違いだと感じることもありました。私たちは作品

を創ることによってメッセージを発することができるという利点に気がつき、なすべきことであると考えています。

学生たちは、学生時代の間4年間でテーマを探しているわけですが、漠然としたものではなくきっかけを与えられて、そのことをテーマにして作品を創ることができるようになれば、今後の創作活動に、大変意義深いことだと思います。

限られた余命を生きるホスピスの患者さんに対しての作品創りというのは、大変重く、畏れ

のおおいテーマです。そのため、しり込みしてしまう学生もいましたが、ホスピス・緩和ケア医師の第一人者である渡辺正先生の講義で、先生が学生たちの様子を察知してくださって、「患者さんのことを思って一生懸命創ったら伝わるから大丈夫」と言ってくれました。「10人患者さんがいて、一人でも心が癒されたらいいじゃない」って。現場のお医者さんの言葉が、学生の心をほぐす結果になって、表現の豊かな作品が生まれました。今年の春に、愛知県がんセンター中央病院と愛知病院で、作品を展示し、消しゴム版画のワークショップを開催しました。初めてだったんで、学生が萎縮しても、患者さんたちに不快な思いをさせてもよくないしと、

考えていたんですが、患者さんたちや家族の人たちの反応がすごくよかったんです。その反応は学生たちも驚くほどで、普段痛みを堪えている患者さんたちが、消しゴム版画のワークショップへ来られて、夢中になるんですよ。点滴を下げた患者さんが、普段なら痛くて堪らない方が、夢中になっているつかの間、「痛みを忘れちゃった」と言ってくれたんです。患者さんから「ありがとう」って、お礼を言われて学生たちも安心して、ほっとしましたね。自分たちが作ることで、こんなに人が喜んでくれるんだ、と実感したんです。ただ自分のテーマを突き詰めるだけではないものを、彼らはいっぱい学んだと思うんですね。学生らが卒業し、プロの作家に

なったとき、プロの作家としての活動はプロとして行い、あるときは、こういうところへボランティアな精神で参加する、そういう図式が出来てきて欲しいなど。自分のこととして参加できるようになっていけば、素敵だなと思っています。将来、社会の問題とアートの係わりが、現在よりもっと豊かなものに変わっていくことは楽しみでもあるし、また社会にとっても必要なことだとも思います。ただし、金田さんとは、「急がないように」と毎回確認してるんです。無理に急いで、方向がずれてしまったり、相手に失礼な程、踏み込んでしまうようなことはよくないです。学生たちにも、重すぎて潰れちゃわないようにね。



伊神妙子さん



金田 亜可根さん



渡辺正さん

▶ 「いのちと希望のアート展」のための連続講座

去る7月2日、「いのちと希望のアート展」のための連続講座の本年度第3回目の講義が開かれました。今回は、作品を作るうえでの心構えと、作品を考えるうえでの疑問点を解消すべく、また、今年度11月7、8日に開催される「日本死の臨床研究会」の年次大会に美術のブースをいただいて参加するための準備として、ホスピス研究会OKAZAKI 金田 亜可根氏のもと、公立学校共済組合東海中央病院 緩和ケア 渡辺正医師、日本音楽療法学会認定音楽療法士 伊神妙子氏が、学生たちの質問に応える形で進められました。医療の現場でしか経験することのできない貴重な体験談に、神妙に聞き入る学生たちの姿が印象的でした。



講義を受けた学生たちの声

夏休みに入って人気のないキャンパス。休み中も毎週月曜日に、「いのちと希望のアート展」のための連続講座に参加する学生の有志が集まって、今後の進め方について打ち合わせを続けています。「日本死の臨床研究会年次大会」への参加プロジェクト、消しゴム版画、緩和ケア病棟への作品展示、の3つのテーマについて進めています。講義を聴いて3週間近く経ったところで、学生たちはどんな感想を持ったか、また、どんな作品を創ろうと思っているか、究極の命題に対しての率直な考えを伺いました。学生の言葉から。

「自分ひとりで考えていると、『死』っていうことが重くて、だんだんどうしようか、どうしようかと、ふさぎ込んでしまうような方向ばかりになってしまいます。それが、金田さんや渡辺先生の話聴いて、死ではなくて、『生きる』ことなんだと、前向きなものなんだとわかりま



した。そこを糸口にして作品は考えていこうと 思っています。

「毎日を精一杯生きている人たちで、その人を思って一緒に過ごしたり、ごく普通の毎日を過ごしたりというのが大事で、そういう感覚で、自分が楽しいと思ったものを素直に伝えるのがいいんじゃないかなと思ってます。

「生きてるってイメージを作品にしたいです。でもそれをどう創るかはまだ決めてないですけど…。安心させるような作品の中にも、闇、暗い部分とか、そういうのがあってもいいのかな

と思います」。

「最初、同情のような気持ちが先になっちゃって、そのことばかり考えていたんですけど、話を聴いてみると畏敬の念みたいなのが湧いてきて、患者さんはそんなに弱くはないって、だから…、明るい作品にしたいなって思います。本当は、実際に患者さんに会ってみたいんですけど」。

「去年も作品を創ったんですが、自分自身が何を創っていいのかわからなかった状態で、悩みをそのまま作品にしました。今回は、自分のできることの精一杯のことを作品にすることで、見てくれる人もそれを感じてくれると思うんです。あまり深く考えずに、今の自分にできることを作品にできたらいいなって思ってます。

「死に向かっていくというよりは、これから生きていってそういうふう考えたほうがいいというのを聴いて、ホスピスとかに対する考え方も変わった気がします」。

「伊神さんは、音楽で患者さんの好きな曲を演奏したり、できることを精一杯やってこられた。私たちにできるのは、何かを創ったりとかなので、できることで協力、何ができるかまだよくわからないですけど、できたらいいな。私は版画なんですけど、アートクリエイターの人達为中心になってますけど、版画の方にも宣伝して、ちょっとでも集められたらいいかなって思ってます」。

「私も去年から参加させてもらってるんですけど、去年は大学に入ったばかりだったし、何を出していいのか、テーマも難しいし、漠然としたものしか出せなかったんです。すごく落ち込んだりした。今思えば、それはそれでいい経験だったと思うんですけど、今年になって、話し合いの機会が増えたり、自分

ひとりだけで死についてグーッと考えるんじゃないかと、皆と向き合ったりしてるので、多少ゆとりがあって、去年よりはいい方向へ進んでるなと思ってます。ゆとりがあるから真剣に向き合える作品が創れていくんじゃないかな」。

「私も、死について考えると落ち込んでしまって、暗いイメージばかりしかないから、作品を創るときも柔らかいタッチにしようとか明るい色で描こうとか、すぐそういうふうには思っちゃうんですけど、逆にそれでいいのかなとも思うんです。自分がもし患者さんだったら、あんまり嬉しくないかもなと考えるてみたり、だったらそんなことを考えずに自分の思いを描けばいいのかなとも思うんですけど、そうしたらそうしたで、何描けばいい

かって。自分の方向性がまだ固まってないから描けないし、本当にどうしたらいいかわからなくて。今、みんなの話を聴いてたら作品だけがすべてじゃないんだ、向き合うのは作品じゃなくて患者さんだって、改めて感じました」。

それぞれに、テーマの大きさに思い悩み、消化しようと苦闘している姿がありました。そして、この難題が、学生たちをクリエイターとして、また、人として、大きく成長を促すことは間違いことのように思われました。究極の命題に対する答え。結論は出せないなかもしれませんが、創作に携わる者として、誰もが一度は考えてみるべきテーマなのかもしれません。



< 寄稿 >

いのちの現場 ～心の解放～

ホスピス研究会 OKAZAKI 代表
金田 亜可根

【ホスピス研究会 OKAZAKI】

平成12年1月に発足。市民・患者の視点で「いのち・医療」について考え、医療情報を発信している。現在の会員は約130人。講演会・模擬患者体験・ホスピス・緩和ケア病棟に関する報告書を作成するほか、自宅を開放し、奇数月に「患者さんお話を会」、偶数月に「患者家族の会」を開催している。

りに何か心に届く音楽や絵画があれば、人はそのものを通して、どの空間にも、好きな時に、好きな時間だけ思いを馳せることができます。人はたった1枚の絵からも多くのことを紡ぎだせるのです。それはどんなものであれ、その方に大切なことに違いありません。アートは、今の医療・福祉の現場で失われているものを、補うことができるのではないかと思います。アートとは、自分と心通わすもの、生きるために必要なものです。

ホスピス研究会 OKAZAKI 活動

「医療といのち」を考える市民団体。2007年より、貴大学の西村教授にご賛同いただき共に行っている「いのちときぼうのアート展」は、医療情報とアートを同時に展示し、多くの方と「いのちと医療」を考えることを目的とします。研究会活動で培った医療者との信頼関係を基に、学生への「いのちの連続講座」の企画・愛知県がんセンターでの作品展示（寄贈）、学生が行う患者さんとの消しゴム版画ワークショップのコーディネート等を、活動の一つとして行っています。治療やケアだけが、患者さんを救うのではなく、患者さんを思う心さえあれば、誰もが何かができます。貴大学のご協力で、がん患者さんの為に意義ある活動を共に行えることを、心より感謝申します。

芸術への期待「生きることを学ぶ」

多くの学生の方々は、講座で死を学ぶことは、

「生きることを学ぶのだと、気づいていきます。また、関わる患者さんから喜びをいただくことに気づきます。学生の「いのちの講座」感想からは、芸術のこれからが見えます。「祖父が亡くなった時、初めて父の涙を見た。何かを失った時と何かを手に入れた時は似ていると思う。この企画を通じて新しい「いのち」の形、「アート」の形を生み出せたらいい」「私という小さないのちのある人間の小さなメッセージをたくさん考えて、強い気持ちを持ち続けられれば、薄っぺらではない想いが見る人に伝わっていくと信じ、これからも絵を描いていきたい」などなど、揺れ動くいのちへの思いそのまま、生きることを真剣に問いかけてくる若い方々の感性に、今は教えられるばかりです。

私の好きな作家須賀敦子さんは、「人それぞれ自分自身の孤独を確立しない限り、人生は始まらない」（コルシア書店の仲間たち）と書いています。それならば、人生を終えていく時には最も強い意志が必要なのでしょう。私が、もし人生の終焉を病院で迎えるのなら、理想としては、生まれてきた時のように、自然に生を終えていくような医療を受けているはず。そしてそこには、きっと自分の思いを託せる何かを持っていくでしょう。誰とも共有できない思いを、それを見つめることによって満たされる為に。それは音楽か、絵画か、使っていた器でしょうか。最期まで、そのような感性を持ち続けられる人生を送りたいものだと思います。

心通わすもの

人は、何かわからない力に癒されることがあります。私は、息子を亡くした1年後、ある画廊で、ケネス・アーミテイジの真っ白な子供の像を見ました。なぜか、確かに息子はそこにいて、私の涙はいつまでも止まりませんでした。死を間近にし、心を誰にも開かなくなった患者さんに、「大丈夫ですか？」と、言葉で聞けば反発するけれど、音楽で聞くと受け入れてくれる。と、ホスピス音楽療法士の伊神さんは言います。体は動かなくとも、心は最期まで動いています。死ぬ意味、大切な人との別れ、様々な思いが去来します。

しかし、物理的、心理的に自由を奪われていく今の病院や福祉の現場で、だれがこの方たちの思いに寄り添えるのでしょうか。心をするほど研ぎ澄ました方たちは、自分を守るために心を閉じていくことも多いと聞いています。心を自由に遊ばせる時間や空間がないことが尊厳を失わせていきます。思うにならない環境だからこそ、そして最期の時間だからこそ、自分の周



▶ 音楽療法の現場から ～ 解明されつつある音楽療法の効果～

音楽文化創造学科科長 久保田進子

落ち込んでいるときに音楽を聴いて励まされたり、元気が湧いてきたりするというのは、誰にでもある経験ではないでしょうか。音楽を聴いて気分が変わるということは、実際に誰もが経験していることですが、その実、具体的には何が変化したのかは、わかっていません。その変化を見える形で捉えようというのが、久保田先生の研究テーマです。

久保田先生は、血液中の免疫力を高め

るリンパ球の一種、ナチュラルキラー細胞（NK細胞）に着目し、名古屋市厚生院の協力のもと高齢者の方が1時間の音楽療法を受療する前後でどのようにNK細胞が変化するのかを検討しました。その結果、19名中16名にNK細胞の活性化がみられ、量的にも質的にも有意に変化を示していることが確認されました。

「NK細胞は生体の様々な状態（加齢、ストレス、感染等）によってよく変動すると言われていています。肉体的ストレス、精神的ストレスによっても、NK細胞活性が低下することが伺えます。今回NK細胞活性化がみられた16名の方は音楽療法が精神的にも身体的にもよい方向へ働いたためと考えられます。」

この研究は日本国内では大きく取り上げられ、日本音楽療法学会でも高く評価されました。しかし、この年に開催された世界音楽療法学会（ワシントン）

では、研究発表として選ばれたものの反発もありました。

「それは音楽療法士からの反論でした。音楽療法の効果は十分にわかっている。それをわざわざ血液採取をしなくてもよいのではという意見でした。一方、出席していた音楽療法研究家、医師たちは一応に私の研究に賛成してくれました。先進国のアメリカでこのように反発をされるとは夢にも思っていず、驚きました。また音楽療法の研究方法自体にいろいろな意見があり、日本と同様に世界でも大きく二つに分かれていることを知りました。しかし、音楽療法の効果を客観的に示すには、やはり科学的な研究も必要と思い、現在では侵襲性の低い唾液検査により、精神的ストレスの軽減度、また心身の活性化の測定を行っています。」

では、音楽療法時に使用する音楽はどのようなものがよいのでしょうか。音楽

精神テンポ (メンタルテンポ)

心理学や精神医学で古くから研究されている心地よいと感じるビートのこと。利き手の人差し指でひざの上でビートを刻み、その数を数え、10秒間での回数をカウントする。最も心地よいと感じる速さで数え、その数がそれぞれの精神テンポとなる。日時を変えて何回も計測し、その平均値を算出する。

の要素はいろいろありますが、音楽療法にとって最も影響が大きいのがテンポといえると思います。

「音楽療法のセッションで音楽を選ぶときは、クライアント（療法を受ける人）さんの状態、背景等いろいろ考慮します。そして音楽のテンポを考えます。このテンポは非常に重要です。クライアントさんの精神テンポと音楽のテンポを合わせなかったら、悪化させることもあるくらいです。」

クライアントさんのその時の精神テンポ（メンタルテンポ）に合ったテンポ、内容の音楽を用いるのが、音楽療法の基本となります。

「これは、同質の原理と言って、クライアントさんと同じ気分や体のテンポと音

楽が常に同質の関係にあるというアメリカのアルトシューラー（精神科医）が提唱したものです。つまり音楽療法をスタートするときは、クライアントさんと同じ状態から始め、次第にそれを変化させ、最終的には異質のものを受け入れられるようにするということです。」

「音楽療法がうまく進めば、患者さんの状態に変化がみられ、よい方向にむかっていることを確認することができます。しかしながら、客観的な判断（数値にあらず等）をしなければ療法士の国家資格化や保険点数を取得することは非常にむづかしいのが現状です。本学卒業生へは療法士としての病院、施設、学校関係からの就職の依頼も入っていますが、一般には音楽療法士の仕事への認識は高い

とはいえません。音楽療法学会では、より客観的な効果判断ができるようにいろいろな職種（音楽療法士、医師、心理学者、大学教員、音楽家、作業療法士、理学療法士、看護師等）の人々が研究に励んでいます。国内で音楽療法が受け入れられるまでには時間がかかると思いますが、様々な研究を進めていくことが必要ですし、また一方では臨床をしている方が、日々のクライアントさん達の微小な変化を丁寧に読み取ることも大切なことだと思います。研究と臨床の両方がうまく結びついた時、日本でも音楽療法の必要性を十分に認識してもらえるのではないかと思います。1日でも早い音楽療法士の資格化を願い更なる研鑽に励みたいと思います。」

Close up!

進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-ism



『ポートレイト』
2007年 アクリル、パネル
162.0×135.6cm 高橋コレクション



Vol.17
NUA-OG
名知聡子

1982年(昭和57年)、東京都生まれ。
2005年 美術学部卒業
2004年 ギャラリーMOCA
2005年 「ON」 ギャラリー山口
「daily work」 art space dot
2006年 「ホームメイド」+ギャラリー
2007年 「第26回損保ジャパン美術財団選抜奨励展」
「新進アーティストの発見inあいち」
「daily work 2007」 art space dot
「GIRLEXHIBITION」 Lギャラリー
2008年 「花・風景-モネと現代日本のアーティストたち」
大巻伸嗣、蛭川実花、名知聡子
熊本市現代美術館
北名古屋市在住。

片思いのエキスなんですよ



『幸福と絶望』 2008年 アクリル、パネル 240.0×1140.0cm 高橋コレクション



『花・風景』展(熊本市現代美術館)
アーティストトークで桜井館長と

巨大な作品の中の女性。すべて作者自身がモチーフとなっている。心の揺れ、諦め、あるいは、燃えるような情熱…、どの作品も、見る人の胸に迫ってくるような何かを感じさせる。見る人の年齢が10代、20代なら、自分の心の問題、ことに恋愛の悩みを、リアルに感じるのではないだろうか。年齢を重ねた者にも、過ぎ去った日の“青い痛み”を思い起こさせるに十分な、鮮烈さが宿っている。

「自分の感情を伝えたくって。自分を描くのが一番すっきりするんです、はまるっていうか。自分の気持ちを伝えたいから自分を描いてる。他のものにそれを投影して描いても、いまひとつで、自分を描いた方がしっくりくるんです。だから、自分」。

静的に感じる絵とは正反対に、生き生きと語りだす。「大きいほうが良くないですか？」

人間を等身大より小さく描く気がしなくて…。もっと細部まで描きたいから、目とかも、大きい方がよくなって。ギャラリー

よりも美術館が好きなんですけど、美術館って、特に現代美術ってドデカイのとか、インパクトのある作品があるじゃないですか、そういうのが好きなんです。見に来た人が『わあー！（感嘆の溜息）』ってなれるくらい。展示場所へ行って、そこでドキドキさせるとなると、大きくなっちゃうんですよ。てらうことのないストレートな言葉。感情を伝えたいという通り、作品からは、静的でありながらも、見る者を釘付けにするような、生々しさが伝わってくる。

「あたし、今までは、恋愛ベースみたいな作品だったんです。そのせいだと思います。作品に出ているのは、片思いのエキスみたいなものなんです。これからは変わっていくんだと思うけど…」

「ドキドキして欲しいんですよ」とにこやかに話すが、作家として活動を始め、気持ちに変化があったという。「作品が認め

られるようになると、なんか、ちょっと意識が変わっちゃうんですよ。以前なら、これ終わったら捨ててもいいやくらいの勢いで、後のこと考えずにやってたんです。塗りつぶしたり、壊したりとかも平気だったんです。でも、考えるようになってしまいました。前の作品を超えるものを絶対に作らなきゃいけないって。自分とかかわる人が多くなって、期待されるようになって、プレッシャーというか。学生の頃は、何を作っても、誰にも何にも言われないから、できるうちにそのことを楽しんで欲しいですね。その楽しさを知っているなら、卒業してもきつとうまくいくはず、たぶん」。

最も新しい作品の「幸福と絶望」も失恋の感情を作品にしたものという。「恋に絶望しても、爪も伸び、髪も伸び、細胞は生きてる。それでも私は生きてるっていう絵なんです。若々しい春から、季節は朱夏を迎えようとしている。

「やっぱり人だよなって」



Vol.18 NUA-STUDENT 中野香織

デザイン学部デザイン学科
ヴィジュアルデザインコース 4年



「中学の頃から、デザインの仕事に就きたいって憧れていたんです」ポスター、や広告、お洒落で綺麗なグラフィックデザインに憧れ、早くから自分の進む道を決めていた。ところが、大学受験で大きな壁にあたってしまった。1年間、浪人して志望校を目指したが、それでも叶わなかった。「浪人して、ここに来たっていうことに、すごくコンプレックスがありました。今でこそ、友達の大切さに気が付いたんですけど、1、2年のときは、今ほど友達を大事にしてこなかったのかもしれないです。自分にはもっとやらなきゃいけないことがあるように思っていました」やりたいことが明確で迷うことがなかった自分にとって、周りは自分とは関係なく、自分の向かうところへ自分が行ければいい、そう思っていた。友達もいるが、それが一番ではなかった。自分のやるべきことはわかっているつもりだ

った。生真面目に課題をこなし進んでいけば辿り着けるはずだった。

「ヴィジュアルデザインって、人に伝えることだったんですね。向こう側に人がいることなんです」課題をこなし、時を経て、わかったことはデザインの本質だった。それまでは「課題に対して友達に相談するようなことはしなくなかった」という自分が、友達、周りの仲間の大切さに気付かされた。「丸くなっていったんでしょうか」と笑う。デザイン学部は、1年時はコースで分かれておらず、同じクラスにさまざまな分野を志望する学生がいる。「2年になってコースが分かれて、悩んで、だんだん変わってきた子を見てきて、話してみても自分とは違う考え方をしていることにやっと気付いたんです」コンプレックスを感じ片意地を張って、少し無理をしていたのかもしれない。時は、ゆっくりと人を育てて行く。

【先生からのひとこと】4年前期に、産学協同研究によるグループワークを、コンテスト形式で実施しています。その際、リーダー的役割でグループを牽引し、展示およびプレゼンテーションで最優秀賞を受賞しました。ここ数年の中でも、特に優れたデザインによる提案になりました。個人としての「私」と他者、周りの人から「見えざる人々」まで、意識のなかでデザインが展開されればと思います。卒業研究を含め、その後の永い時間での「私」に期待します。(デザイン学部教授・落合紀文)

「デザインも個性だと思うんですよね、うん」

好奇心旺盛な人。作品にはその興味の対象が投影されている。日常の生活にあるもの、女性らしくお菓子、あるいは、絶滅が危惧される希少動物…。素材も多岐にわたり、メタルにをベースに、紙、布、糸…。自在に行き来する。「金属と何か異素材を組み合わせるのが好きで、自然と頭がそうなっちゃうんで…」次から次へ広げる作品の写真とその説明。ひとつひとつの意図を明確にし、説明を加えてくれる。多作。作品からも口ぶりからも、バイタリティが感じられる。

もともとイラストを志望してデザイン科に入学したが、1年の課題で出会った立体の魅力に取り付かれた。「野菜を作ったとき、私、オレンジを作ったんですが、めっちゃめっちゃ上手くできて。それでなんだか平面は違う気がしてきちゃって。ジューシーで、食べたくなるオレンジができてしまったんです」。1年の後期で、ガラ

ッと変わってしまった。「立体の楽しみを知らなかったんですね、きっと」。

作品には、デザイン出身らしく明確な意図があるが、同時に強い作家性も感じる。「よく言われるんですよ、造形（立体造形コース）じゃないのって。でも、想いが詰まっていた方が伝わりますよね、絶対、うん」、と自分に言い聞かせる。大学院の中でも意見が割れると話しはじめる。「考え方が全く違って、デザインに個性は在っちゃいけないっていう人がいるんです。私は個性だと思うんですよね」まだ自分の中で、折り合いは付いていないという。揺れ、悩み、惑う心境も告白する。その真摯さ、ひたむきさが心地いい。

目的に対して、真っ直ぐに進むことが、良い点であると同時に、反省するところと自己分析する。惑い、悩むことが、作品により深みと面白さを与えてくれることになるだろう。



Vol.19 NUA-STUDENT 桑山明美

大学院
デザイン研究科 1年



【先生からのひとこと】桑山さんは、何事に対しても「とにかくトライしてみよう」の精神で、デザインの枠を越えた好奇心旺盛な、行動力ある学生です。学年が上がるにつれ、頭の中で考えている事を「カタチ」に出来る豊かな感性と、時々思いもかけぬ驚きのある作品を見せてくれる。今後の課題は、素材の特性だけに頼ることなく、もうワンランク上を目指し、創作の楽しさや苦しさを経験することで、後一年、色々な事にチャレンジしながら、個性ある「物作り」に取り組んで欲しい。(デザイン学部教授・久野利博)

大学 大学院

学生支援課の発足にあたって 学生部長 菅嶋康浩

近年、社会の情報化・グローバル化が急速に進むなか、変化に柔軟に対応でき、豊かな感性と創造性に富み、社会で活躍できる能力が求められてきており、そうした社会に対応できる人材を育成することが高等教育機関に強く求められています。

他方、こうした激変する社会の中で、大学生の興味や関心、目的意識や価値観などが多様化しており、本学の在学生たちが充実した

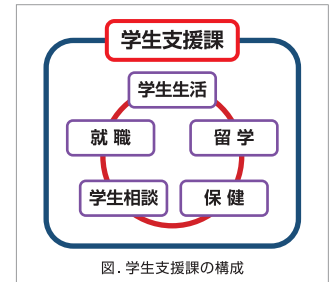
学生生活を送り、社会に対応できる能力を有して卒業できるように支援することが学生支援課の役割と考えています。

より充実した学生支援を行っていくために、本年度より教務学生課から分かれて学生支援課としてスタートしたのです。

学生支援課は、図に示しましたように、学生生活、就職、留学、保健、学生相談からなり相互に連携をとりながら多面的に対応する組織体

形を取っています。また当然、教務課とも相互に連携をとり合う学生部組織として業務を遂行します。東キャンパスの学生支援課は1号館1階東に位置し、7名の職員が勤務しています。同館2階東に保健室と学生相談室が向かい合わせにあり、保健室は保健師1名が勤務、学生相談室は4名の相談員が交代制で勤務しております。また西キャンパスの学生支援課は事務棟1階西に位置し、6名の職員が勤務しています。事務棟の1階東に保健室があり、職員1名が勤務、A館2階に学生相談室があり、4名の相

談員支援が交代制で勤務しています。学生に充実した学生生活を送っていただくように学生支援課の職員一人ひとりが業務に当たって参りますのでご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



大学 大学院

飛騨・世界生活文化センター関連事業 クレイアニメを作る — 輪ニメーション2009 —

「飛騨国際メルヘンアニメ映画祭2009(12月5日開催、飛騨・世界生活文化センター)」で上映されるクレイ輪ニメーション(リレーアニメーション)のキャラクターを、子どもたちが制作するワークショップが8月8日(土)、三重県立美術館で行われました。

子どもたちを指導したのは、はしもとまさむ氏(クレイアニメーター)と鈴木勇士氏(本学洋画コース助手)のお二人でした。

今回のテーマは、『森の動物たち』で、各自、自由に森の動物たちを一人最低一個は作るということでスタートしました。森の動物と聞いて、陸上動物を作る子が多く、3個作る子もいました。どちらかというと小動物が多かったのですが、中には、大きな鳥を作った子も。

会場では48体のキャラクターが完成しましたが、保護者の方たちと一緒に楽しくアニメ作りをする子どもの姿が印象的でした。

この企画は、8月29日(土)に各務原市産業文化センターで行われた「アニメまつり2009 in かかみがはら」でも実施されました。今後も、岐阜県・三重県で後2回開催

され、子どもたちが制作したキャラクターを、本学美術学部・デザイン学部で編集、音楽学部で楽曲を付けてアニメーションとして完成させ、上映される予定です。



音楽学部

名古屋芸術大学ミュージカルが 「第3回 大邱国際ミュージカルフェスティバル大賞特別賞」 を受賞しました!

去る6月15日(月)から7月6日(土)に韓国大邱市で第3回大邱国際ミュージカルフェスティバルが開催され、本学ミュージカルコースが「大賞特別賞」を受賞しました。

このフェスティバルは、韓国では国をあげてのイベントで、今回で3回目の開催になります。参加国も韓国をはじめ、中国、ロシア、アメリカ、日本(本学)と、各国から予選を勝ち抜いたプロ、学生の24団体の公演が22日間に渡って行われ、技量を競い合うというものです。

本学の参加は一昨年と今回の2回目の招待参加で、演目は「プリーマイティー ジャンヌ」。

ジャズを楽しむことを禁じられた時代に、救世主ジャンヌが現れ、若者にジャズの楽しみを取り戻すのだが、最後にはその代償としてジャンヌが犠牲になる…というストーリー。本学の公演はフェスティバル最終公演日の7月4日(土)、15時と19時の2回で、大邱市内の啓明大学アートセンターで開催されました。

1回目の公演は、開場前から指定券を求める観客の列がはじけ、開演時には約1000名が来場。韓国のお客様は大変ノリが良く、キャストが登場するやいなや、指笛や歓声が吹き荒れました。公演中も、お客様のクイックなレスポ

ンスに、見ているスタッフもお客様と同化し思わず歓声を上げていました。公演は約2時間。お客様の暖かい拍手や喝采に包まれ、客席が一体となった、素晴らしい時間を過ごすことができました。

公演終了後、興奮さめやらぬロビーでは、掲出された本学キャストの写真の前で、記念写真を撮っている方々や、なかなか帰ろうとしない方々。韓国スタッフから「とても素晴らしいステージと演奏にみんなビックリしています。」と教えていただき、皆さんに本公演を十分に楽しんでいただけたのだと嬉しく思いました。また、ミュージカルフェスティバル実行委員長の裴(ペ)氏や、啓明大学アートセンター館長の金(キム)氏がロビーに駆けつけ、絶賛していただく場

面もあり、大成功であったことを実感しました。

2回目の公演は、直前に空模様が急変。滝のような大雨となり、地下の楽屋に水が入り込み、ステージ横の搬入口は50cmほど浸水してしまいました。しかし、その豪雨の中、びしょ濡れになりながら多くのお客様が来場。2回目の公演も来場者数は、約1000名と1回目と同様、盛況となりました。

7月6日(月)には、フェスティバル授賞式が啓明大学アートセンターで開催されました。

会場は約1700人の観客。19時30分に授賞式が始まり、はじめに本学ミュージカルコースがゲストとして、ダンスパフォーマンスを披露。本学公演の時と同じく、多くの歓声がわきました。続いて授

賞式。次々と賞が発表される中、本学ミュージカルコースは見事「大邱国際ミュージカルフェスティバル大賞 特別賞」を受賞。代表でミュージカルコース3年神谷桃子さんが壇上に上がりました。司会者より感想を求められ「カムサハムニダー」。客席から割れるような喝采を浴びました。

今回の韓国公演を終え、国際ミュージカルフェスティバル実行委員長や啓明大学から、是非とも韓国の学生、本学の学生共演によるミュージカル公演を行いたいとのご意向を受けました。次回の本学ミュージカルコースの韓国公演は日韓共同。どんな作品に仕上がるか楽しみです。



公演の様子



公演終了後のロビーで記念撮影



授賞式(右端が神谷さん)

音楽学部

ジャズポップスコース・ワークショップ:
Brazilian Music—“Happy Dreams”
が行われました!

2009年9月1日(火)午後、東キャンパス2号館大アンサンブル室において、音楽学部音楽文化創造学科ジャズポップスコースの主催によるワークショップが行われました。出演は、Brazilian Music—“Happy Dreams”で、代表の伊藤亜紀子氏は本学演奏学科弦管打コースをフルート専攻で卒業された方です。

ジャズポップスコースでは、ロ

ビーコンサートをはじめ、学内外での演奏活動を積極的に行なっています。ジャズはご承知のようにアメリカが発祥の地ですが、世界各国の様々なリズムやメロディーの影響を受け、現在も進化し続けています。ジャズ演奏家を多く輩出しているアメリカのパークリー音楽院で学んだ、様々な国籍と経歴を持つメンバーによるコンサートは興味深く、ジャズが常に進化

している状況を体験してもらうことが可能です。ジャズポップスコースの竹本義明教授の挨拶の後、さっそく演奏が始まりました。“Happy Dreams”のメンバーは、代表の伊藤亜紀子氏(FI)と、福本純也氏(Pf)、ライナス・ビイルシュ氏(CI)、マルカス・サントス氏(Perc)、レナート・マラバシィ氏

(Drs)、カイオ・スロンゾン氏(B)の6名で、素晴らしい演奏が披露されました。

ジャズポップスコースでは、9月24日(木)にも、熱帯JAZZ楽団のメンバーと日本を代表するドラマーの神保 彰氏をゲストにお迎えして、スペシャルロビーコンサートを行いました。



音楽学部

親子で楽しむ!!
「音楽は友だちコンサート」
が行われました

2009年9月6日(日)午後、名古屋市青少年文化センター アートピアホールにおいて、親子で楽しむ!!「音楽は友だちコンサート」が開催されました。このコンサートは、名古屋市・(財)名古屋市文化振興事業団と本学音楽学部音楽文化創造学科音楽教育コースが主催して行われたもので、コンサートの総司会を務める同コースの取越哲夫教授が、長年にわたり取り

組んでこられた音楽体験実践(夏休みを利用した僻地の小・中学校における出前演奏会)が、名古屋市のご協力を得てアートピアホールで一般公開されたものです。

プログラムには、日本の伝統音楽も取り入れている、伝統音楽の学習に苦慮している学校現場では、雅楽の演奏は喜ばれ、幻想的な雰囲気を持つ雅楽は、児童に新鮮な音楽の感覚で捉えられているとの

ことです。演奏は、金管五重奏・木管五重奏・ハンドベル・雅楽・マリリンバと続き、また、合唱・重唱・ピアノ連弾や、オペラ・ミュージカル(ダンス)まで多彩で、総合的な演奏会となっています。

この演奏会は、児童に音楽の楽しさ・素晴らしさを伝えるのみでなく、音楽教育コースで教員を志

す学生自身にも、音楽の持つ無限の魅力を体験を通して再認識させることが出来ます。また、自らが学ぶことの喜びと与えることの喜びを同時に体験させることが可能な大変意義深いものといえます。

このコンサートは、来年以降も毎年9月初旬に開催される予定とのことです。



人間発達学部

2009オープンキャンパス on 8.29.
人間発達学部 子ども発達学科

名古屋芸術大学人間発達学部子ども発達学科では、8月29日(土)、7月に引き続き2回目のオープンキャンパスを開催しました。残暑厳しい日差しのなか、午前10時の開始前から参加者が次々に東キャンパスを訪れ、ロビーで受付をすませると学部説明会へと向かいました。

将来の夢に近づく!

模擬授業で大学生活を体験。

学部説明会は、東キャンパス1号館7階のアゼンブリーホールで開催されました。人間発達学部の概要から授業やサークル活動の様子、夏の合宿や国際交流のイベントなど、学生生活のあらゆるシーンの紹介、そして入学試験に

ついて、選抜方法や試験日程などを詳しく説明。今回のオープンキャンパスではAO入試の受験審査も実施されることから、AO入試についての説明もありました。

その後、3つの教室に分かれ模擬授業が行われました。模擬授業①「学生とすすめるミニ授業—社会科辞典づくり」では、2011年から社会科学習において『47都道府県の概要について理解する』ということが加わるため、「47都道府

県事典」という冊子を元に授業をしました。模擬授業②「子ども虐待と保育者・教育者の役割」では、社会問題にもなっている子どもの虐待を取り上げた模擬授業とあって、大勢の高校生や父兄が参加しました。模擬授業③「音楽と保育・教育」では、楽しく音楽に関わり、音楽に対する興味・関心を持ち、音楽経験を活かして子どもの生活を明るく潤いのあるものにするための態度と習慣を育てるにはどう

したらよいか、実際の授業風景を見ながら考える授業となりました。

クラブ活動の見学や 体験イベントで盛り上がる!!

模擬授業のあとは、参加者は学生食堂でランチをとったり、校内で行われているクラブ・サークルの発表を見たり、体験イベントに参加するなど、オープンキャンパスの一日を楽しみました。

体育館では、リズム体操部のク

ラブ活動の発表とラート体験が行われました。学内では、他にも調理実習室で「学生が授業で行った子どものお菓子作りと野菜嫌いをなくす、ご飯の試食体験」、「小麦粉粘土の造形や制作活動にチャレンジ!」、「自然と暮らしを楽しむ会」などが開催されました。また、「知りたいこと、何でも聞いてコーナー」が設けられ、学科の内容や受験、学生生活についてなど、さまざまな質問に教員が答えました。



模擬授業① 学生が都道府県の調査結果を発表



模擬授業② 子ども虐待の生まれる家庭環境などを学ぶ



模擬授業③ 音楽の授業で先生と楽しむ子どもたち



学生でのランチの際は、オリジナルタオルまたはペンケースから一つをプレゼント



リズム体操部では、オリジナルのキッズ体操「ジャンプDE GO!」を披露



素晴らしい演技に参加者も拍手のラート演技

参加者の声

【高校3年女子(安城市)】「模擬授業で大学生の話が聞けて良かったです。学生生活は楽しそうで、しかも真剣に勉強にとり組んでいる感じがして、理想的だと思いました。」

【高校2年男子(名古屋市)】「リズム体操部が楽しそうでした。自分たちで振り付けを考えて体操を作るということは、やってみたいと思いました。模擬授業は先生が真剣に講義を

してくれて、実際の大学の授業を受けている感じがして身が引き締まりました。」

【高校2年女子(四日市市)】「学生の人がみな親切で、いろいろ話しかけてくれてとても

感激しました。私も大学生になったら、そうになりたいなと思いました。ランチはどれもおいしそうだったので迷いましたが、ハンバーグにしました。おいしかったです!」

人間発達 学部

人間発達学部主催 「特別公開講座」が行われました

2009年8月8日(土)、名古屋市東区の愛知県女性総合センター(ウイルあいち)ウイルホールにおいて、人間発達学部主催の特別公開講座が開催されました。講師に白梅学園大学教授 民秋 言先生をお招きして、「新保育所保育指針・幼稚園教育要領からの学び—小学校との連携について考える—」との題名で行われました。講演では、新保育所保育指針に

みる子どもの育ち(発達)について、まず、幼稚園教育要領と保育所保育指針の新旧対照表を示しながら、どのように変わったかについてやさしく、詳しく解説され、子どもを健やかに育てていく上で、幼稚園と保育所の区別がなくなったことが強調されました。続いて、育ち(発達)を捉える基本的視点としての発達過程区分と心情・意欲・態度、育ち(発達)を考える理由、

等についてのお話がありました。最後に、小学校との連携、接続が今回の改定で最も重要なことだと強調され、保育所や幼稚園での子どもの育ちを小学校に伝えることの意味、保育者としての社会的責務についてのお話がありました。

会場には、県内外の幼稚園・保育園から約500名の先生方や保育・教育を学ぶ学生約100名、総勢600名ほどが集まりました。講師の解説に真剣に聴き入り、こまめにメモを取るなど、参加者たちの熱心な姿で会場は埋め尽くされました。



美術学部 デザイン学部

新しい自分に出会えるキャンパスライフの体験 「一日芸大生」が開催されました!

「みんなが芸大生になる日」を合言葉に、小中学生やシニア層を対象にした恒例のイベント「一日芸大生」が8月2日、西キャンパスで開催されました。美術学部、デザイン学部の各コース主催で企画されたコースから、参加者は自分の好きなコースを見つけて応募する形式です。当日はあいにくの雨模様にも関わらず、キャンパスは子どもたちやシニアのみなさんでいっぱいになりました。

タイムスケジュールは、午前10時から入学式、正午までコース授業が行われました。昼食タイムをはさんで、午後の授業は4時まで行われ、その後は卒業式で各コースの実施報告が行われ、作品を提

出した受講生全員に卒業証書が授与されました。

■モデルを写生、コラージュに(洋画コース)

アトリエの壇上には真っ赤な服を着たモデルが登場。アーティストになった気分モデルをスケッチ。アクリルで描いた後は、雑誌の写真を使ってコラージュします。

■桌上的金魚を日本画にしてみよう(日本画コース)

教室には涼しげな金魚鉢が登場。中で泳ぐ金魚をスケッチし、日本画の絵の具で着色を楽しみました。

■消しゴムを彫って、自分だけのシールづくり(版画コース)

花や動物や宇宙人…思い思いに選んだ素材を消しゴムに彫って、自

分だけのシールが完成。

■粘土板(タタラ)で自分の顔を作る(彫塑・立体造形コース)

テラコッタ用粘土を板状(タタラ)に用意し、曲げたり、くり抜いたりして、自分の顔や動物などを作りました。

■パソコンでオリジナル・アニメをつくる(メディアデザインコース)

絵を描き、写真に撮って、パソコンに取り込み、編集ソフトでオリジナル・アニメ作り。大人でも難しい?本格派アニメ編集を体験。

■じぶん辞典を取材してつくる(ライフスタイルデザインコース)

自分の担当する文字を選び、キャンパスに出て取材。「ぬ」ならば「ぬるぬるしたカタツムリ!」といった具合。撮影、編集して雑誌を作ります。

■木を切って、オリジナルのコマで絵を描いてみよう(スペースデザインコース)

木の上に下絵を描いたら、工房で加工。糸ノコ・マシンも最初はおそろおそろ、でもすぐにみんな使いこなしていました。

■ゼリーの型を作って食べる!(インダストリアルデザインコース)

好きな絵を木型に加工、それを元型にしてバキュームフォーム(真空成型)でゼリー型を作成。ゼリーを流しこんで、オリジナル・ゼリーの出来上がり。

■カラフルなミサンガを作ってみよう(テキスタイルデザインコース)

「カードウィービング」という伝統のワザを使って色とりどりのミサンガを作りました。

■ **本格ガラスアートに挑戦!** (工芸コース)

中学生が対象のコース。炉で溶けたガラスを思い思いに加工。

■ **シルバーアクセサリーを作る** (ジュエリーコース)

バーナーの火をはじめとは思えないほど自在に操って、銀の指輪やペンダントづくりに励んでいました。

保護者のみなさんも興味津津。アートやモノづくりの楽しさを満喫いただけたのではないのでしょうか。また、シニア向けクラスとして「美術史」や「陶芸」も併催。こちらは落ち着いた雰囲気の中でじっくり講義に耳を傾けたり、ロクロを回したり…。それぞれに有意義な夏の日を過ごしていただきました。



美術学部

**美術学科洋画コースの主催で
「現代美術に関するレクチャー&対話」
シリーズが開催されました**

美術学部美術学科洋画コースでは、社会の第一線で活躍しているアーティストや美術関係者をお招きし、現代美術について語っていただく「現代美術に関するレクチャー&対話」シリーズを開催しました。在学生や卒業生に現代美術の動向を理解してもらい、誇りと自信をもって制作に携わってもらうことを意図しています。以下は、本年度前期に開催された講演者と日程です。

- 【第1回】秋吉風人氏のレクチャー & 対話 2009年5月19日(火)実施 (本学大学院美術研究科修了)
- 【第2回】後藤繁雄氏のレクチャー & 対話 2009年5月27日(水)実施 (クリエイティブ・ディレクター/京都造形芸術大学教授)
- 【第3回】大庭大介氏のレクチャー & 対話 2009年6月24日実施 (東京芸術大学大学院美術研究科修了)
- 【第4回】大庭大介氏と青山悟氏の

対談 2009年6月25日実施 (シカゴ美術館附属美術大学大学院修了)
【第5回】青山悟氏のレクチャー & 対話 2009年6月26日実施



アーティスト発掘の様子や様々なアートシーンについて語る後藤繁雄氏
会場に集まった後輩に語りかける秋吉風人氏
学生に語りかける大庭大介氏
時折冗談も交え和やかにレクチャーする青山悟氏
後藤氏の話に興味をもち聞き入る学生たち
[leg of woman who disliked me]

デザイン学部

**2009年度デザイン学部特別客員教授
「脇阪 克二 (SOU・SOU) 展」
が行われました**

2009年5月27日(水)~6月6日(土)まで、本学西キャンパスX棟和室で、「脇阪 克二 (SOU・SOU) 展」が開催されました。

SOU・SOUは、脇阪 克二氏(テキスタイルデザイナー)、辻村 久信氏(建築家)、若林 剛之氏(ディレクター)の3名による異分野デザイナーのコラボレーションによるブランドで、「日本の伝統の軸線上にあるモダンデザイン」をコンセプトにして活動しています。

彼らは、地下足袋、手ぬぐい、バッグ、クッションといったさま

ざまなアイテムを、ポップなテキストスタイルで表現し展開しています。また、他国の製品が市場にあふれる今日、伊勢木綿の生地や有松鳴海絞りといった伝統産業の素材や技術を生かした100%国産の、現代的感覚にあふれる布プロダクトを発表しています。

「脇阪克二 (SOU・SOU) 展」では、長らくマリメッコ社(フィンランド)、ラーセン社(ニューヨーク)で活躍して来られた脇阪克二氏のSOU・SOUでの仕事を中心に作品が展示されました。

学内では学生対象にSOU・SOU3名による講演が行われました。また学生対象で、本学地元の地場産業であり、SOU・SOUの商品も生産している有松鳴海絞りの産地で、地下足袋生地でのデザイン立案~染め~生産までのワークショップが行なわれ、今年度末にはSOU・SOUのプロダクトと共に発表される予定です。



美術学部

デザイン学部

**美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展
~ザ・ベストテンから日本レコード大賞まで~ 関連イベント
「ザ・ベストテン The Talk」/「ザ・ベストテン The Concert」**

名古屋芸術大学アート&デザインセンターでは、2009年度企画展として、美術プロデューサーであり本学音楽部客員教授の三原康博

氏が制作した1980年代のテレビや舞台の美術セットの数々を紹介する「美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展」を、7月10

日(金)~29日(水)の日程で開催しました。その関連イベントとして、7月17日(金)に、「ザ・ベストテン The Talk」と題し、三原氏とテレビプロデューサー・山田修爾氏をお招きし、当時の音楽番組「ザ・ベストテン」を振り返って

ただく対談を開催。進行役は名古屋芸術大学音楽学部・音楽文化創造学科ミュージカルコース教授の森泉博行氏が努め、3氏がさまざまなエピソードを語り合いました。また、美術学部・デザイン学部のオープンキャンパスが行われた7

月20日(月)には、「ザ・ベストテン The Concert」と題して、伝説の歌番組「ザ・ベストテン」の楽曲を楽しむ野外コンサートが開かれました。

スリリングなスケジュールで番組を制作

「ザ・ベストテン」は、1978(昭和53年)1月12日から約12年間にわたり、毎週木曜の午後9時から、TBSで生放送されていた歌番組です。若者を中心に絶大な人気があり、司会の黒柳徹子さんと久米宏アナウンサー(当時)の軽妙なおしゃべりと番組の快いテンポが受けて、スタートから3年後の秋には41.9%の視聴率を記録。視聴者からのリクエストカードは総計9500万枚にのぼったといいます。

その「ザ・ベストテン」で、12年間にわたりすべての放送の企画・演出に携わったディレクターが山田氏であり、10年の間、毎週、歌手の舞台となるセットを幾つも生み出した美術家が三原氏です。

三原氏の仕事は、歌手と音楽のイメージに沿ってセットの模型を造り、その設計図に色や寸法などを具体的に指定、現実のセットとしてスタジオ内に表現することで。立体模型を造ってプレゼンテーションするという手法は、演出家や照明家など各分野のスタッフに自分の意図を納得させるのに効果的な方法だということです。番組のために造った数々の模型が、今回、アート&デザインセンターで展示されました。

山田氏は、「木曜夜9時放送の生番組は、その前週の火曜から準備がスタートする」と、放送までの流れを説明。火曜日にリクエストが集計され、そしてレコードの売り上げ、ラジオ、有線放送などのデータが集まりベストテンが決まります。放送一週間前の木曜にはセットを造る楽曲が決まり、金曜には作家と台本の打ち合わせ、デザイナーとセットの打ち合わせが次々と行われます。三原氏は、「金曜と土曜が私に与えられた時間。

イメージを膨らませてラフスケッチから模型を造り、それを実地製作図面にします。月曜には大道芸会社に発注し、火曜の会議により修正があることも。水曜の深夜にはスタジオ内にセットが組み立てられます。木曜の午前中にリハーサルがありますが、その間も微調整をします」ということで、1週も休まず、このようなスリリングな日々が続いたということです。

伝説の歌番組「ザ・ベストテン」コンサートを開催!

会期中、美術学部・デザイン学部のオープンキャンパス(体験編)が行われた7月20日(月)には、学生食堂前で「ザ・ベストテン The Concert」と題して、「ザ・ベストテン」の楽曲を楽しむ野外コンサートが開かれ、オープンキャンパスの参加者や在校生、先生方の前で、歌とダンス、演奏を披露しました。



「美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展」にて、右手に見えるフロウは、名古屋芸術大学オリジナルミュージカル「Fairy Tales」の舞台となった童話の森の万人としてデザインされたもの。小さな翼がついているところから「タッキー」と呼ばれる



「ザ・ベストテン」のために造られた模型とスタジオ写真。模型は実際のセットの40分の1の縮尺で作られている。左手前に見える模型は、中森明菜「ミ・アモーレ」(1985)のセット模型



コンサートステージのセット模型のコーナー



参加者はユーモアを織り交ぜた「ザ・ベストテン」3氏の話に引き込まれた



「ザ・ベストテン The Concert」

デザイン学部

デザイン学部クラフトブロックの作品展「素材展」

デザイン学部クラフトブロックの全学生及び教員による本年度前期の作品展である「素材展」が、本学西キャンパスで、7月31日(金)~8月5日(水)まで開催されました。学部生(2年~4年)の作品展は、アート&デザインセンターのギャラリー BE&beで、大学院生は、ギャラリー Xで、そして、教員の作品展は、X棟1階の和室で行わ

れました。また、特別に、「ジュエリー作品展」がX棟1階のジュエリー工房前で行われました。この展覧会は本年度で8回目を迎えています。毎年、クラフトブロックのメタル&ジュエリーデザインコースとテキスタイルデザインコースの学生や教員全員が、自由な発想で様々な素材を使って作品を制作し、それらを展示し一般

公開することから「素材展」という名称で行われています。西キャンパスデザイン学部の全

ての展示場を使った大規模な催しとなり、見ごたえのある作品が出品された展覧会となりました。



Column NUA No.8

沈まぬ太陽の思い出

人間発達学部教養部会 講師 東條文治

長年海外で地質調査をしています。僻地でキャンプ生活を余儀なくされることが多いです。不慣れた調査生活も回数を重ねると慣れ、日が沈んだら星を眺めて寝、寒暖は服で調節する生活に不満もなくなります。一方生活がシンプルだと天体の運動や気候、多様な生物の存在や活動に敏感になり思わぬ発見があることもしばしば。

数年前に最古の多細胞動物の化石の調査に参加する機会を得たのですが、この調査地はロシア北海沿岸にあり、北極圏から約150km南に位置していました。北極圏とは真夏に太陽が沈まず、真冬に太陽が昇らない北緯66.6度以北のことです。ただし北緯66.6度という数字は幾何学的な理論値で、実際には太陽の視直径などの影響があり北極圏(北緯66.6度)から約90km南の場所まで太陽が完全には沈まない現象が夏至の日に観測できるのです。調査期間も6月中旬から夏至を挟んでの日程だったので、白夜を体験する絶好の機会だったのですが、60km足りない…。日本から参加したメン

バーは太陽がぎりぎり沈んでしまうと知ってがっかりでした。

とはいえ又とない機会であり、夏至の日に太陽の動きを撮影し理科教材にするために徹夜を決め込んだのです。午後10時を過ぎると太陽の位置は水平線に近くなり、ゆっくりと滑走路に着陸するかのように動いていきます。真北に来ると太陽は沈んでしまうことを知っていた私達は、完全に沈むのを今か今かと待っていました。ところが、みんなの目を釘付けにしたまま再び離陸し始め、太陽はその日沈まなかったのです。あわてて真北の方位やサマータイムの補正をした時刻も確認し、

グループ校特集／名古屋保育・福祉専門学校

カリキュラム・シラバス・授業の見直しから

名古屋保育・福祉専門学校副校長 藤澤卓美

名古屋芸大グループは、本校に隣接した滝子幼稚園から出発した歴史がある。その歴史を物語るように、かなり太い樹木が数本園内に立っている。

保育科二部(夜間)の2年の授業、小学校教科「生活」で、幼稚園の園庭に生える植物の名前調べをした。園児の数に比べてやや園庭が狭いので、雑草の生える場所も限られているが、春先の植物の代表となる数種類が自生していた。

◇ 環境を活かした授業づくり

園内の植物調べに続いて、園庭に植えてある樹木名調べに進んだ。何種類かの植物図鑑を用意し、調べさせた。もちろん自生の樹木はないと考えられるが、コバノチョウセンエノキ、トウジュロ、ナンキンハゼ、カキ、イヌマキ、シダレザクラなど、20種類ほどである。その中から、一人一種類を選択させ、名札作りをさせた。名札のデザインをする、ヒノキの板を糸鋸で削り貫く、字を書く、色を塗る、樹木に設置する活動を組んだ。

設置直後の園児の反応を観察させたいと思ったが、二部の学生には不可能である。そこで、名札を見た園児の反応を予想させた。

名前のひらがなを読もうとする。名札を見て、木に種類のあることに気づく。

触ってみようと、ジャンプしたり、手を伸ばしたりして触ろうとする。

名札のない木を見て、「この木は、何というの」などと興味を持つ。

など、いくつか出てきた。あらかじめ、幼稚園の先生たちに、実際の園児の反応の記録をいただいていたので、それを紹介し児童の反応の観察に替えた。

その後、幼稚園教育要領、保育指針の内容から、樹木の名札に関係のある環境や言葉に関する内容を抜き出し、その違いや内容の意味を検討した。

保育者が園の環境づくりに積極的に関わることは当然であり、その能力を育てていかななくてはならない。名札作りという一見単純な活動であるが、多くの経験と学びが可能であり、学生一人ひとりの能力が発揮された授業となった。

◇ より実践的な授業へ

より実践的な授業にしていかなければという思いが強い。その理由は二つある。一つは学生の実態からである。大学全入時代を目前にし、本校入学生の実態も大きく変化してきている。もちろん社会人入学生の割合が3割を超えることもあり、学生の能力も多様化してきている。もはや大人数を前にした一斉講義式の授業で進めていくスタイルでは、学生の実態と大きくかけ離れた授業になってしまう。自分自身の授業の反省も含めてそのことを強く実感する。

もう一つは教育現場の要請からである。具体的な体験に基づいた

柔軟な発想を持ち、子どもに合わせた授業展開、活動構成ができる実践力を備えた教師が求められている。それには、常に対象である子どもの生活やその実態に深く関心を持ち、一人ひとりの感じ方や思いに心を寄せる教師に育てなくてはならない。

我々教師自身がそうした授業を作っていく努力が必要である。

◇ 能力の向上から能力の発揮へ

学生の能力が不足しているから能力を付けなければという考え方がある。一方、多様な学生一人ひとりのもつ能力を十分発揮させようという考え方がある。

学生の現状から、後者の考え方を基盤にした授業に変えていかなければと思う。

競争の中で育ってきた学生たちは、常に他人と比べてたり比べられることに慣れていて。その結果、常に劣等感が付きまとい、自分自身に真の自信が持てない者も多い。こういった状況を考えると、授業の改革と同時に評価方法も十分検討していく必要がある。講義資料やノートを暗記してきて、それをいっせいに吐き出すような試験とその結果を優先した評価方法では、これまた学生の実態から

遊離していると言わざるを得ない。この方法が、時には学生の挫折感に拍車をかけ、学校への興味を失わせることにもつながっている。入学した学生を卒業させることができるよう指導することが我々の使命である。一人ひとりの能力を十分発揮させられるよう、体験を重視したより実践的な授業に変えていかななくてはならないと思う。

本校は、本年度、文科省の教員養成機関指定申請を行う年に当たり、教務主任を中心に仕事を進めている。この中でも、カリキュラムの総点検とシラバスの検討を教員全員で行ってきた。特に本年度から始まった芸大への3年次編入に関し、カリキュラム上の整合性を精査した。そして、平成22年度事業計画大綱においては、「カリキュラムの総点検とシラバスの内容の検討」を教育改革の中核に置き、今からできることは着手している。また、初年度指導の充実も欠かせないと考えている。学生と教職員との触れ合いを深める機会の充実、少人数学級の実施、少人数指導の導入なども検討し、特に入学年前期の指導の充実を来年度から進めていきたいと考えている。



太陽が水平線に沈むはずの場所を光ったまま通り過ぎたことに目を疑いました。ただでさえ明るく寝付けぬ夜を過ごしていた日本のメンバーはさらに不眠に…。

地質調査は無事進んだものの、モスクワへの帰路につく段になって迎いの船と連絡が取れないという事態が発生します。延長された日程で崖の上へと調査範囲を広げると、崖の上の空気が生温いことに気がつきました。測定すると水面付近では気温は10℃、30mの崖の上では20℃を超えていました。周辺の大気では北極海から流れ込む海水に冷やされ下ほど温度が低いという逆転層ができていたのです。

これで謎が氷解！逆転層は曇気層を生みます。“沈まなかった太陽”とは水平線の下に隠れた太陽の光がこの逆転層によって地球の表面に沿って曲げられたために見えた光ではないか。早速、水平線近くの太陽を望遠レンズで撮影してみると案の定、曇気層で平たくつぶれた形をしているのが確認できたのです。一方、“迎いの船問題”は進展を見せず(無線で船長と連絡が取れず数日が過ぎ)、やむなく緊急のヘリを呼んで帰ることになりました。ヘリから眺める風景は名残惜しく、太陽が沈まない真夏と、太陽が昇らない真冬に生きる人々の暮らしについて思いをめぐらしました。



マスター ↑↓to アーティスト



【第8回】

＜自由と不自由＞

須田真弘 美術学部 美術学科
洋画2コース准教授

- 1665年 三重県生まれ
- 1989年 愛知県立芸術大学卒業
- 1991年 愛知県立芸術大学大学院修了
- 2008年 TrAIN Research Centre, University of the Arts Londonで一年間研修
- 1992年 「イメージの新様態」ギャラリーすずき (京都)
- 1995年 「[existence] ギャラリーセラー (名古屋)
- 「Yellow Room」クリテリウム19 (水戸芸術館現代美術センター)
- 1996年 「[topical] Japanese Contemporary Artist greet 1100years of Hungary (ハンガリー)
- 1997年 「眼差しのゆくえー現代美術のポジション」(名古屋美術館)
- 1998年 「[TOKYO ROOMS] Gallery Article (ケルン)
- 1999年 「[Aufenthalt] Murata & friends (ベルリン)
- 2001年 「[Colorscape] アートスペース dot (名古屋)
- 2002年 「Japan at this Moment」 Gallery Vartai, Vilnius (リトアニア)
- 「Pro Tubo」 Theodor Zink Museum, Kaiserslautern (ドイツ)
- 2003年 「Da Sein」 Ernst Barlach Museum, Wedel (ドイツ)
- 2004年 「[UNUSUAL COMBINATION] +Gallery (名古屋)
- 2006年 「Form and Drawing」北京中央美術学院 (中国)
- 2009年 「[NO-ISMI] Bodhi Gallery (ロンドン)
- 「presence & absence」 Pridi Banomyong Institute (バンコク)



きれいに片付いたアトリエ。壁には、鮮烈な原色で描かれた洗練された作品が並ぶ。そして、その中に混ざって、アフリカか東南アジアのようなプリミティブな土着的なマスクが飾られている。一見、不釣り合いに見える2つが、奇妙に調和し、居心地のよい空間を作り出している。

アトリエが片づいていることには理由があって、バンコクでの展覧会に出品し、ラオスを小旅行して帰国したばかりでアトリエをしばらく空けていたとのこと。これまでの活動を見てもわかるとおり、数多く海外で個展、展覧会を開催。また、いくつかの海外の学校でも講義を務めたコスモポリタンである。

「いままで20カ国くらいは行ったと思います。個人的には、まだまだもっと行きたいところがあって…」。

大学院を出たばかりの頃、初めて訪れたロンドンで衝撃を受けた。現代美術の若い



アーティストたち、自分と同世代のアーティストたちが、活躍して脚光を浴びていた。当時の日本の状況とは大きな隔たりを感じた。ロンドン、NY…、芸術に対する裾野の広がり、層の厚さ、マーケット、何もかもレベルが違った。「もっと視野を広げないと…」も

っと世界が見たい、それ以来、時間を作って旅に出るようになった。始めはアメリカ、ヨーロッパを中心に、美術館やギャラリーを徹底的に見て回った。教科書でしか知らなかった本物がそこにはあった。そして、ダイナミックなアートを巡る環境に触れ、アートに対する考え方を深めていった。

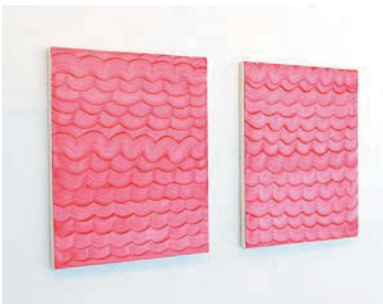
絵画、オブジェ、展示スペースさえも黄色。黄色を使った作品を作り続けた。そして、それらは高く評価されて行った。こうした活動が、10年近く続く。

「黄色の作品を作っていた頃は、結構、頭でシステムを考えていましたね。初めて、ロンドン、NYを見て、作品に込めた考え、美術のセオリーとでもいうのか、それがすごく大事だと思いました。それで、自分でルールを決めながら、1色だけで、内容も全部決めて、制作にかかってましたね。そ



『mountain』
55 × 45 cm oil on canvas 2009年

絵の具って混ぜると、彩度が落ちるんですね。単色。それが一番強い。きれいですね。



『waves』
各 41 × 32 cm oil on canvas 2009年

うすると作品のイメージが固定化されてきて、自分でもシステマチックに作品が作りやすくなっていくんです。こうして何十年もやっていけば、アーティストとしていいんじゃないか、と思いました」けれども、少しずつ考えには変化ができました。もっといろんな可能性があるんじゃないか、閉塞感が自分のやってきたことを疑わせた。こんなとき出会ったのが、タイの古陶磁だった。偶然、展覧会に誘われて訪れたタイ。田舎の古い窯跡で陶片を拾って歩いた。「宋胡録」(「スンコロク」サワンカロークの音訳)として桃山や江戸時代の茶人にも珍重された古陶磁の形状や絵付けの伸びやかさに魅せられた。「最初は全然興味がなかったんですけど、ヨーロッパにはないじゃないですか。こういうのを見たときの面白さに、自分も、もうちょっと伸びやかにやっていってもいいんじゃないかなと」

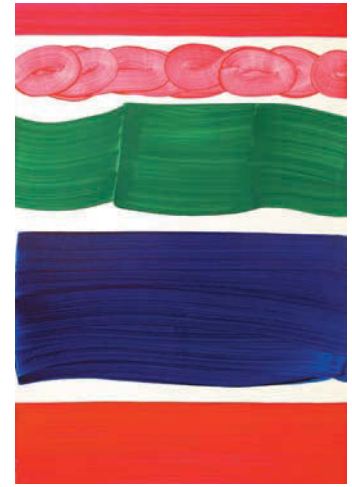


『head』
65 × 55 cm oil on canvas 2009年



『dark face』
30 × 21cm oil on paper 2009年

学生たちには、自由であること不自由さのあること、この2つのバランス感覚が大切だと教える。「美術は本来自由なものなのに、絵を学び始めて上達してくると、だんだんとある意味、不自由になってくるんですよ…。中学生とか高校生くらいになると知識やテクニックも少しずつ向上する反面、自由に描けなくなる。小学校低学年までの頃は、絵を描かせるのもものすごく速いし、無心でどんどん描ける。それが、いろんなものを学んでいくうちに、その自由さが失われ、ある意味不自由になっていくんですね。そうして、絵が痩せていく。面白くなっていくことがあるんですよ。自由と不自由さを、いかに自分自身の中でバランスを取って作品に出していけるか。それができる人はアーティストとして魅力のある作品を制作できるでしょう。半分子供のような感覚を持っていながら、でも、片方で鋭い



『untitled』
162 × 112 cm oil on canvas 2009年



紙に描くのは、毎日、何十枚も描いてましたね。時間のある時は、今でも描いていますよ。



昨年度ロンドン滞在中でのスタジオ。

美意識を備えていて大人の意見が言える。そういう人ですよ」黄色い作品を作っていた頃は、少し不自由になりかけていたのかもしれないと振り返る。「科学は人々に安心を与えるが、芸術は動揺を与える」20世紀初頭のフランスの画家、ジョルジュ・ブラックの言葉が好きだと話してくれた。自由であることの意味…。

「いつになったらいい作品が作れるだろう、って思ってるんですよ」貪欲な姿勢と創作意欲は、変わることはなさそうだ。西洋と東洋、現代と過去、自由と不自由、主観と客観…。アトリエの作品は、それぞれに作家の心のせめぎ合いを語っていた。

2009年10月～2010年3月までの主な行事・イベントスケジュール

※予定は変更になる場合がありますので、事前にご確認ください。

音楽学部

- 名古屋芸術大学オーケストラ
第27回 定期演奏会
10月15日(木) 18:45開演予定
愛知県芸術劇場コンサートホール
入場料:1000円
- 研究生特別演奏会
10月29日(木) 18:30開演予定
電気文化会館ザ・コンサートホール
- 第17回 ピアノの夕べ
11月5日(木) 17:30開演予定
電気文化会館ザ・コンサートホール
- 第32回 定期演奏会
11月12日(木) 18:00開演予定
三井住友海上しらかわホール
- 第28回 室内楽の夕べ
12月10日(木) 18:00開演予定
熱田文化小劇場
- 電子楽器コース演奏会
12月11日(金) 18:30開演予定
熱田文化小劇場
- スペシャルコンサート
～コンチェルトの夕べ～
12月12日(土) 16:00開演予定
本学東キャンパス3号館音楽講堂ホール
- 冬期音楽講習会
12月24日(木)～27日(日)
本学東キャンパス
- 大学院音楽研究科特別演奏会
2月9日(火) 17:30開演予定
電気文化会館ザ・コンサートホール
- 平成21年度研究生修了演奏会
2月10日(水) 18:00開演予定
電気文化会館ザ・コンサートホール
- 第8回 歌曲の夕べ
2月12日(金) 18:30開演予定
電気文化会館ザ・コンサートホール
- アンサンブル・フィラルモニク・ア・ヴァン
第11回 定期演奏会
2月19日(金) 18:30開演予定
長久手町文化の家 森のホール
- 第14回 春のコンサート ピアノのしらべ
2月20日(土) 17:30開演予定
電気文化会館ザ・コンサートホール
- オペラ公演「小さな魔笛」
2月27日(土) 13:00開演予定
三重県文化総合センター小ホール
- 第37回 卒業演奏会
3月4日(木)・5日(金) 18:00開演予定
三井住友海上しらかわホール

- オペラ公演「小さな魔笛」
3月9日(火) 18:00開演予定
岐阜市文化センター小劇場
- 大学院音楽研究科
第12回 修了演奏会
3月10日(水)・11日(木)・12日(金)
3日間とも18:30開演予定
三井住友海上しらかわホール
- オペラ公演「小さな魔笛」
3月13日(土) 14:00開演予定
愛知県立芸術劇場小ホール
- ミュージカル公演「Fairy Tales II」
3月18日(木) 18:30開演予定
3月19日(金) 14:00開演予定
名古屋芸術創造センターホール
入場料:1000円
- 平成21年度 音楽企画(7)
“ザ・ルネッサンス21”
3月24日(水) 18:00開演予定
本学東キャンパス3号館音楽講堂ホール

美術学部 デザイン学部

- アート&デザインセンターの
展示会スケジュールを含む。
- JAGDA新人賞受賞作家作品展2009
10月9日(金)～14日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター
 - 大学院洋画制作展
10月23日(金)～28日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター
 - 旧加藤邸アートプロジェクト2009
10月31日(土)～11月8日(日)
北名古屋市回想法センター
 - 新世代ガラス展/G.E.N
11月6日(金)～11日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター
 - 遭遇するドローイング '09展
11月20日(金)～25日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター
 - 名古屋芸術大学後期交換留学生作品展
12月4日(金)～9日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター
 - 幼稚園児たちのゲイジツ展
12月4日(金)～9日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター
 - 日本画3年作品展
1月8日(金)～13日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター
 - 洋画3年洋画展
1月15日(金)～20日(水)
本学西キャンパスA&Dセンター

- AFTER REMISEN # 11
柴田麻衣+平田あすか
1月26日(火)～2月2日(火)
本学西キャンパスA&Dセンター
- アトリエコンサート ドキュメント展
1月26日(火)～2月2日(火)
本学西キャンパスA&Dセンター
- 第37回 卒業制作展
3月2日(火)～7日(日)
愛知県美術館ギャラリー
名古屋市民ギャラリー矢田
本学西キャンパスA&Dセンター
- 第14回 大学院修了制作展
美術研究科・デザイン研究科
3月9日(火)～14日(日)
名古屋市民ギャラリー矢田

人間発達学部

- 平成21年度 親子講座
9月2日(水)～11月26日(木)
9:30-12:00(毎週水・木曜日)
本学東キャンパス9号館3F
- 芸大際(全学同日開催)
10月30日(金)・31日(土)
本学東西両キャンパス

名古屋保育・福祉専門学校

- 体験入学
3月13日(土) 13:00～
- 入学選考日
10月10日(土)・24日(土)
11月14日(土)・28日(土)
12月19日(土)
1月23日(土)
2月20日(土)
3月 6日(土)
- 進学相談会
10月17日(土) 10:00～
11月 7日(土) 10:00～
12月 5日(土) 10:00～
1月16日(土) 10:00～
2月 6日(土) 10:00～
- 学校祭
11月7日(土) 10:00～

幼稚園(クリエ)

- 平成22年度入園願書受付
10月1日(木)
- 運動会
10月10日(土) 9:00～
- 秋のおんがく会
11月14日(土)

- 発表会
12月12日(土) 9:30～
- クリスマス会
12月21日(月)
- 造形展
1月24日(日)
- おんがく会
2月9日(火)・10日(水)
- お楽しみ会
3月2日(火)
- お別れ会
3月11日(木)
- 卒園式
3月15日(月)
- 新入園児体験入学
3月17日(水)
- 終了式
3月23日(火)

幼稚園(満子)

- 平成22年度入園願書受付
10月1日(木)
- 運動会
10月4日(日)
- いもほり
10月20日(火)～28日(水)
- 作品展
11月7日(土)
- 秋の遠足
11月13日(金)
- クリスマス会
12月18日(金)
- おもちつき大会
12月21日(月)
- 入園説明会
1月28日(木)
- 生活発表会
2月21日(日)
- 一日動物園
2月25日(木)
- ひな祭り会
3月3日(水)
- 卒園式
3月17日(水)

編集後記

少子高齢化社会を迎え、老後の生活(年金)や医療・福祉に対する関心は年を追う毎に高くなっています。年老いて身体が不自由になったり、病気で動けなくなっても、安心して生活でき、いのちを全うできる社会を誰もが望んでいます。人の生命と医療・福祉に関するシンポジウムなどが各地で開催されていますが、今回は、「医療・福祉と芸術」について特集しました。医療や福祉の分野における芸術の役割や期待されることについて、芸術療法や音楽療法の本学における取り組みや、緩和ケアのための「いのちと希望のアート展」などを紹介しています。

ニュース&トピックスは、学生サービスの充実を目標に、この春から大学事務組織に新設された「学

生支援課」を紹介しています。音楽学部では、Brazilian Music Band、Happy Dreamsのジャズ演奏ワークショップを取り上げました。人間発達学部は、8月末に開催された第2回目のオープンキャンパスを。美術・デザイン学部は、本年度のギャラリー企画である「美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展」などを紹介しました。

「グループ校特集」は、カリキュラムの点検やシラバスの検討など、教育改革に取り組む名古屋保育・福祉専門学校を取り上げました。

本誌へのお問い合わせやご意見は下記のメールアドレスまでお寄せください。
geibun@nua.ac.jp



大学基準協会の 認証評価に合格しました

本学は2006年4月に、認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。認定期間は、2006年4月から2011年3月までです。これによって、法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。



発行:名古屋芸術大学
編集:全学広報誌編集委員会
制作:(株)クイックス
発行日:2009年10月10日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学 芸術文化交流室
〒481-8535
愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
電話 0568-24-0325
Fax 0568-24-0326
E-mail geibun@nua.ac.jp